

〈訳注研究〉

蔵訳『阿闍世王経』第Ⅺ章 前半部分訳注研究

宮 崎 展 昌

はじめに

昨年度に公表した拙稿「蔵訳『阿闍世王経』第Ⅺ章訳注研究」(『真宗総合研究所研究紀要』第34号、pp. 77-97；以下「前稿」と略称)に引き続きかたちで、本稿では同経第Ⅺ章前半部分について蔵訳にもとづく訳注研究を提示する¹。

〈阿闍世王経〉(**Ajātaśatrukaukṛtya(prati)vinodana*)の主要部分は、第Ⅴ章から第Ⅹ章で展開される、阿闍世王(**Ajātaśatru*)の抱える後悔の念(**kaukṛtya*)を解消する(**vinodana*)物語である。一方、その主要部分より後の第Ⅺ章以降の部分は、広い意味での「流通分^{るすうぶん}」となっており、本稿で扱う第Ⅺ章前半部分はその最初の部分に相当する。場面としては、阿闍世王の居所である王舎城から釈尊のいる会座へと移り変わる途上の物語であり、同章後半部分で説かれる、阿闍世王が未来世に仏になるという授記までをつなぐ、いわば幕間劇^{まくあい}とも呼べる部分となっている²。

本訳注で扱う第Ⅺ章前半部分の梗概は次の通りである。文殊と阿闍世王の一行が王舎城から釈尊のところへと向かう途中、母親を殺してしまった男に出くわす。そこで文殊がひとりの男を化作し、その化作された男は同じく化作された父母を殺してしまうが、その化作された男は釈尊のもとへ赴き、両親殺しを

1 前稿でも注記したように、訳者は現在〈阿闍世王経〉全体にわたる蔵訳の批判校訂版とそれにもとづく訳注研究および諸訳対照本の公表にむけて準備している。それに先行して、同経の各部分について、蔵訳からの訳注研究を試みに提示し、諸先学の御批正を仰ぎたい。

2 〈阿闍世王経〉全体の構成・梗概については、拙著〔2012：32ff〕参照。章分けについては、拙著〔2012〕や前稿同様、竺法護訳『普超三昧経』にみられる分品を借用する。一方、支謙訳『阿闍世王経』を現代語訳した定方〔1989〕では、章は設けずに、定方氏による独自の分節がなされている。本稿で扱う第Ⅺ章前半部分は定方〔1989〕では第26節から第27節に相当するが、具体的な対応については訳注に記す。

告白して般涅槃に入る。それらを見ていた実在する母殺しの男も、同じく釈尊のもとで母殺しを白状して般涅槃に入るという内容になっている。

第Ⅺ章前半部分をめぐる編纂事情について

拙著〔2012：93-95〕でも触れたように、前後の章節との間には、下記のような断絶性と連続性がみられる。

- 前後との断絶性を示すものとしては、前後で主要な登場人物となっている文殊や阿闍世王が冒頭箇所以外にほとんど登場せず、母を殺した実在の男と両親を殺した化作された男をめぐる物語が中心となっている。
- 連続性を示すものとして、第Ⅹ章から第Ⅺ章後半にかけて場面が王舎城から釈尊のいる会座へと移るが、その移動途上の物語になっており、場面の連続性が保たれている。
- 末尾の § 10 において、母殺しの罪を犯した男が最終的に般涅槃に入ることができたのは、実はその男は過去世に五百の仏のもとで善根を植えてきたからだという説明がされる。それは同章後半部分で、阿闍世が授記を得ることができる理由・背景とも関連しており、阿闍世もまた過去世で諸仏のもとで善根を積んできたから、来世での地獄での苦痛が軽減し、さらには遠い未来世に仏になることができるという説明がされる⁴。

管見の限り、第Ⅺ章前半部分と他典籍のあいだに類似・並行表現などの客観的な証左を見いだすことはできなかったものの、場面は連続していても、全体として挿話的な要素が色濃い。おそらくは同経の主要部分である第Ⅴ章から第

3 なお、拙著〔2012：93〕の見出しでは「(2) 第Ⅺ章前半部分 (XIb) にみられる～」となっているが、「XIb」は誤植であり、正しくは「第Ⅺ章前半部分」を意味する「XIa」である。謹んで訂正させていただく。

4 この点に関しては、竺法護訳では第Ⅺ章が「心本浄品」として一章にまとめられ、後半部分で説かれる阿闍世王への授記と前半部分の物語との間に共通するテーマとして、いわゆる「心清浄説」「心本浄説」を見出していることにも通じるであろう。

X章の部分とは別のかたちで流布していたであろう素材や題材を利用して、同経に組み込まれたものと推測される。

一方、前稿でも指摘したように、法天訳には翻訳過程で加えられたとみられる意図的な改変の痕跡が確認できる。拙著〔2012：53〕でも指摘したように、第Ⅺ章前半部分の法天訳では、同部分の主要な話題になっている母や父を殺したという事柄には一切触れられていない。この点は、法天訳の第Ⅴ章から第Ⅹ章の部分では「阿闍世」という固有名詞やその父王殺しにも全く触れられていない点にも通じる。以上の第Ⅺ前半部分でみられる法天訳に特有の相違点は同訳の翻訳過程における意図的な改変によるものと考えられる。

訳注の方針

本稿でも、前稿の方針を基本的に受け継ぐが、便宜上ここでも再掲しておく。なお、前稿とは異なる点として、本稿で扱う部分にはサンスクリット語断片が比較的まとまって現存するので翻訳の際にはそれらを大いに参照する。

前稿同様、本稿でも〈阿闍世王経〉の蔵訳テキストにもとづく現代語訳を提示する。依拠する蔵訳テキストは訳者が現在準備を進めている、暫定的な批判校訂本⁵とし、用いた蔵訳資料の間に重大な異読がみられた場合は注記する。言うまでもなく、同経の蔵訳テキストは翻訳文献であるので、そのもとになったであろうサンスクリット語文を可能な限り想定することを試みる。以下、その他の点について箇条書きで記す。

- ・【分節】訳者の判断にもとづいて、前後で話題や場面が切り替わるとみられる箇所を節に区切り、適当な見出しを付ける。
- ・【想定梵語】原則的にアスタリスクを付して記す。ただし、紙数の関係から、単語レベルのものは括弧内に想定梵語を記すのみでその典拠は割愛する。漢訳諸本における、相当する漢訳語も併記したほうがよい場合などはその典拠も合わせて注記する。

5 現時点では、後出の略号表に掲げる16種の資料を用いて、蔵訳〈阿闍世王経〉の批判校訂本を準備している。校訂本の作成にあたっては便宜的にロンドン写本カンギュルを底本とする。

- **〔固有名〕** 紙数の関係から、本稿では想定梵語からのカタカナ表記は初出時に示すのみとし、繰り返される場合は相当する漢訳語を借用するか一般に知られる漢訳名を用いることにする。
- 相当する現存漢訳経典、特に支讖訳および竺法護訳と藏訳との間に注目すべき異同が見られる場合は重点的に注記する。早くとも9世紀頃に成立した藏訳本に比べてかなり古く、系統を異にするとみられる上記両漢訳は、同経のより古い姿を探る上で貴重であり、それらの異同を詳細に調査し、記すことは重要である。

略号および使用テキスト

- BHSD Edgerton, F. ed., *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, 1953.
(Reprint: Rinsen Book, 1985)
- KP *Kāśyapaṭṭipatti*, Vorobyova-Desyatovskaya [2002].
- LCTSD Lokesh Chandra ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1959-1961.
(Reprint: Rinsen Book, 1971).
- MVS *Mūlasarvāstivādin Vinaya Saṅghabhedavastu, The Gilgit manuscript of the Saṅghabhedavastu: being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Part I & II, R. Gnoli ed., Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1977-1978.
- MW Monier-Williams, Monier ed., *A Sanskrit-English Dictionary*, Clarendon Press, 1872. (Reprint: Meicho-Fukyū-Kai, 1986)
- MVy *Mahāvīyutpatti*, 榊亮三郎編著『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』1916-1925。(Reprint: 国書刊行会、1981)
- Skt.fr. 〈阿闍世王経〉サンスクリット語断片, Harrison and Hartmann [2000]
- T. 大正新修大藏経
- Vajra *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, 渡辺章悟編『金剛般若経の梵語資料集成』、山喜房佛書林、2009。

蔵訳〈阿闍世王経〉諸本⁶

A	タボ (Tabo) 寺写本	No. 1.4.15.1 (Running No. 26); Ke 32, 45, 47, 50-51, 53, 61, 61-75, 77-79b2.
B	ベルリン写本	No. 224: mdo sde, Tsha 275b5-343a2.
Ba	バスゴ (Basgo) 写本 ⁷	No. 49.2: mdo, Nga 76a2-160b4.
Bth	タン (Bathang) 写本	No. 57: Pa 150a6-199b1.
D	デルゲ版	No. 216: mdo sde, Tsha 211b2-268b7.
G	ゴーンドラ (Gondhla) 写本	No. 26,01: Ka1b-51a5. ⁸
He	ヘーミス (Hemis) 写本 (I)	No. 48.1: mdo, Nga 133-157a6. (第X章の途中より)
Hi	ヘーミス (Hemis) 写本 (II)	mdo, Nga 77-81, 91-92, 95, 100, 114-118, 148-152a1. (第XI章前半部分は含まない)
J	ジャンサタン (リタン) 版	No. 159: mdo sde, Tsha 234b2-295a6.
L	ロンドン写本	No. 166: mdo sde, Za 273a7-354a6.
N	ナルタン版	No. 201: mdo sde, Ma 339a4-427b6.
P	大谷北京版	No. 882: mdo sna tshogs, Tsu 220a5-281a5.
Ph	ブクタク (Phug brag) 写本	No. 289: mdo sde, Ke 1b1-85b3.
S	トク宮 (Stog Palace) 写本	No. 223: mdo sde, Za 266b7-351a7.
T	東京写本	No. 223: mdo sde, Za 247a8-321a8.

6 チベット大蔵経カンギル諸本の〈阿闍世王経〉の情報については、ウィーン大学の Department of South Asian, Tibetan and Buddhist Studies が取り組んでいるプロジェクトが作成したデータベース The Resources for Kanjur & Tanjur Studies (<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/sub/index.php>: 2017年12月18日確認) を参照した。

7 前稿で扱った第II章に関して、末尾の一覧表で掲げたバスゴ写本 (Ba) のロケーションを誤って記していたので、ここに謹んで訂正させていただく。正しくは以下のとおり。

[第II章: バスゴ写本 (Ba)] §1 88b3-; §2: 88b7-; §3: 89a5-; §4: 89b3-; §5: 90b2-; §6: 90b5-; §7: 91a4-; §8: 92a1-; §9: 92a5-; §10: 92b2-; §11: 92b6-; §12: 93a5-b2

8 前稿では、〈阿闍世王経〉のゴーンドラ写本に関して誤った情報を提示していた。正しくは上記のとおりである。

U ウランバートル写本

No. 272: mdo sde, Za 237b4-312b8.

〈阿闍世王経〉漢訳諸本

【識】 支婁迦識訳『阿闍世王経』（大正新修大蔵経 No. 626）

【護】 竺法護訳『普超三昧経』（大正新修大蔵経 No. 627）

【天】 法天訳『未曾有正法経』（大正新修大蔵経 No. 628）

参考文献

- Harrison P. and Hartmann J. U. [2000] “Ajātaśatrukaukṛtyavinodanāsūtra,” *Buddhist Manuscripts I, Manuscripts in the Schøyen Collection*, Vol. I, Hermes Academic Pub., Oslo, pp. 167-216.
- Vorobyova-Desyatovskaya, M. I. ed. [2002] *The Kāśyapaaparivarta: Romanized Text and Facsimiles*, International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 2002.
- 大西啓一 [2004] 「Kumārabhūta 小考」、『待兼山論叢 哲学篇』38、pp. 1-18。
- 定方 晟 [1989] 『阿闍世のさとり一仏と文殊の空のおしえ』人文書院、東京。
- 長尾雅人・桜部建共訳 [2003] 『宝積部經典』（大乘仏典 9）、中央公論新社、東京。
- 平岡 聡 [2002] 『説話の考古学—インド仏教説話に秘められた思想』大蔵出版、東京。
- 外薗幸一 [1994] 『ラリタヴィスタラの研究』大東出版社、東京。
- 星 泉 [2016] 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京。
- 水谷真成訳 [1971] 『大唐西域記』（中国古典文学大系 第22巻）、平凡社、東京。
- 宮崎展昌 [2012] 『阿闍世王経の研究』山喜房佛書林、東京。
- [2017] 「藏訳『阿闍世王経』第Ⅺ章訳注研究」『真宗総合研究所研究紀要』第34号、pp. 77-97。
- 村上真完校註 [1994] 「阿闍世王経」『阿闍世王経・文殊師利問経他』（新国訳大蔵経 9、文殊経部 1）pp. 36-89、249-350。

（本研究は JSPS 科研費 JP16K16694 の助成を受けたものである）

【蔵訳『阿闍世王経』第XI章前半部分訳注】

第IV章前半部分 母親殺しの男の物語⁹

§1 文殊・阿闍世王一行の出立と母親殺しの男の登場

そこで、マンジュシュリー・クマーラプータ（文殊師利法王子）¹⁰は座より起つと、比丘サンガと随行とともに、阿闍世王の住居より出立した。阿闍世王もまた随行とともに、文殊師利法王子の後に付き従っていると、ある別の場所において、ある男が母親の命を奪い、彼はある樹の根元において泣きながら悲嘆にくれており、

「私は悪しき行いをなしたので、私は必ずや地獄へと行く」¹¹

と言いながら座っているのを、道を進んでいた文殊師利法王子は見た。すなわち、その男もまた文殊師利法王子によって教化されるべき人である。¹²

§2 文殊によって化作された両親殺しの男¹³

そこで、文殊師利法王子は、その男を教化するために¹⁴、もう一人の男を化作した。その男の父母も化作した。そこでその化作された男は父母を伴って、その母を殺した男がいるところに行く¹⁵と、遠く離れてはいないあるところから、

9 【護】「心本浄品第十一」、定方 [1989: 148]「第25節 母殺しと父母殺し」

10 前稿（宮崎 [2017]）の注8で触れたように、文殊（*Mañjuśrī）と併用されて、その形容句とされることが多い「クマーラプータ」（kumārabhūta, *gzhon nur gyur pa*）については、その語義や原義、由来についてはこれまでに明らかにされてきたとはいえない。大西 [2004] 参照。前稿同様、本稿でも鳩摩羅什が用いた漢訳語「法王子」を便宜的に借用する。

11 【識】のこの箇所では「必ず地獄へと行く」という説明がなされておらず、単に「私は母を殺した」となっている。一方、本稿の導入でも述べたように、【天】においては「母を殺した」という記述はなく、単に「我造殺業」となっている。

12 蔵訳では上記のように「文殊師利法王子によって」と明記されているが、【識】【護】ではそれぞれ「是人当得脱者」「雖爾其人、当修律行」と造り、文殊への言及は確認できない。

13 【天】では本節 §2 全体を欠く。

14 【識】および【護】では「その男を教化するために」という文言は確認できない。

15 *ha cang yang rgyang mi ring ba*「遠く離れてはいない」*ha cang yang mi ring ba: *nātidūram* (Mvy 5112) および *rgyang ring ba: *viprakṛṣṭa* (Mvy 4576/5102) を

必ずやその実在する男¹⁶によって見られるであろう、そのような諍いをした。すなわち、〔化作された〕息子は言った。

「道はこちらです」

〔化作された〕父と母は言った。

「息子よ、この道ではない」

というように彼らは言い争っていたが¹⁷、その化作された男が〔化作された〕父と母の命を奪うと、実在する男はその〔化作された〕男の父と母の命が奪われるのを見た。

§3 母親殺しの男が化作された両親殺しの男のあとを追う

そこで、化作されたその男は父母の命を奪うと、その実在する男がいる場所に行って、泣きながら涙で息を詰まらせて、

「私は悪い行いをなした。すなわち、私は父と母の命を奪ったので、私は必ずや地獄に行くだろう¹⁸」

と、そのように〔化作された男が〕言う、と、実在する男はそれを聞いて次のように考えた。

「私は母のみの命を奪っただけであるが、この男は父母二人の命を奪ったことで、この男は悪しき行いをより多くなしている、このものが行くところのその場所（＝地獄）に私もまた行くであろう¹⁹」

と〔実在する男が〕考えると、その化作された男は咽びつつ、

参考に訳出した。ただし、BaGHeでは単に *ha can yang mi ring ba* (= MVy 5112) とする。

16 *skyes bu yang dag pa*: *bhūtapuruṣa. この表現は *skyes bu sprul pa*; Skt.fr.: nirmittapuruṣa と対比させたものと考えられるが、管見の限り、Skt.fr.に対応する語は見いだせない。本訳注では「実在する男」と訳出する。

17 藏訳と漢訳諸本では言い争う部分の発言者が異なる。すなわち、藏訳では化作された男が先に発言して、父母が否定しているのに対して、【識】【護】では先に父母が発言して、それを化作された男が否定するようになっている。

18 【識】ではここでも「地獄に行く」という記述は見られない。注11参照。

19 藏訳では「このものが行くところの、その場所に私もまた行くであろう」という記述になっているが、【識】【護】の両漢訳では「父母を殺した男の罪よりも私の罪は軽い」というような記述となっている。後続の箇所も同様の記述になっている。

「おお、男よ、私は世尊・釈迦牟尼のもとへ行く。それはどうしてかという、彼の世尊は抛り所なき衆生にとっての抛り所であり、畏れを抱いた衆生たちに無畏をあたえることをなさる方であるので、彼の世尊が説かれるように励むべきである」

と、そのように言うと、そこでその化作された男が行くと、その実在する男もまた、

「この男が行くところのその場所へ私もまた行くであろうから、私もまたそこ（＝釈尊のもと）へ行こう²⁰」

と言って、彼の後に従った。

§4 化作された両親殺しの男が釈尊を訪問する

そこでその化作された男は世尊がおられるところへ行き、近づく、世尊の足に頭でもって敬^{きやうらい}礼してから世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私は父母の命を奪いました。世尊よ、私に対して加護くださるようお願いします²¹。私は今何をなすべきでしょうか」

そこで、世尊はその化作された男に「良きかな」という言葉を与えると、

「良きかな、良きかな。おお、男よ。あなたは正直に述べた。正確に述べた。〔あなたによって〕なされたままに述べた。あなたは如来の眼前において真実の言葉を述べた。すなわち、〔あなたの言葉は〕偽りないものであるけれども、男よ、あなたは心の相続について理解しなさい」

§5 心について²²

「過去、もしくは未来、もしくは現在、いずれの心によってあなたは父母

20 前注同様、ここでも【識】【護】の両漢訳で「彼よりも自分の罪は軽い」という意味の記述がみられる。

21 この部分で釈尊に庇護、助けを求める記述は藏訳と【天】に確認できる。一方、【護】には同様の記述は確認できず、【識】ではこの少し後の部分で「仏則言：“勿恐！莫懼！隨我所言。” 其化人言：“如仏所教，惟哀加護。”」という記述が確認できる。

22 『入大乘論』『順修諸行品』にこの部分の引用が見られる。

「如世尊《解除疑悔經》中説也：大王觀察汝心。以何心殺父？為過去心未來心現在心耶？若過去心，過去心已滅。若心已滅，則無方所，亦無住処。若未來心，未來心未至。若現在心，現在心不住。譬如幻化。非青、黃、赤、白、紫、頗梨色。体

性純淨乃至非相、非可見」(T. No. 1634 32.49b5-11)

ただし、同論での引用は、上記で下線を施したように、世尊が阿闍世に説いたものとされているが、本経では父母を殺害した化人への釈尊による説法内容となっている。

一方、「心」に関する言説として、*Kāśyapaṭṭhivarta* にみられるものと本節との間にいくつかの類似点がみられるので参考までに掲げておく。

「彼(菩薩)はつぎのように心をあまねく観察する。愛欲に染まり、憎悪にふるえ、あるいは愚かしくなるというのは、どの心なのか。過去なのか、未来なのか、現在なのか。しかし、もし過去の心であるならば、それはすでに滅してしまっている。未来の心であるならば、それはまだ到来していない。もしまた現在の心であるならば、それは(しばしも)とどまることがない。迦葉よ、実に、心は内にも外にもなく、この両者以外のところにも存在しない。迦葉よ、心は形をもたないもの、見られないもの、抵抗のないもの、あらわれ出ないもの、認知されないもの、基底のないもの、名づけられないものである。迦葉よ、心はいかなる仏陀によっても見られなかったし、現在も見られていないし、将来も見られないだろう。(しかし)いかなる仏陀によっても見られなかったし、見られていないし、また見られないであろうような心ならば、その動きは、どのようなものとして考えられるのか。一ただし、倒錯の誤謬に陥った(心の)たえまない流れによって、存在の法が生起する、という(心の動きの事実)はしばらく別のことであるが。迦葉よ、心は幻影のようなものである。真実性のないものを分別し、さまざまあり方をとって生じる。(中略)迦葉よ、心は夢に似ている。「わがもの」でないものを「わがもの」であるかのように考えるから。(中略)迦葉よ、あますところなく観察が行われるとき、心の存在は認められない。認められないものは、すなわち否定(不可得)される。否定されるものは、過去にもなく、未来にもなく、現在にもない。過去にもなく、未来にもなく、現在にもないものは、三つの時間を超越している。三つの時間を超越したものは、有でもなく無でもない。有でもなく無でもないものは、生まれることがない。生まれることがないものには、そのものの自体(自性)がない。自体がないものには、起こることがない。起こることがないものには、滅することがない。滅することがないものには、過ぎ去ることがない。過ぎ去ることがないならば、そこに行くこともなく、くることもないし、死ぬこともなく、生まれることもない。行くこともくることもなく、死ぬことも生まれることもないものには、いかなる因果の生成もない。いかなる因果の生成もないものは、変化を為することもないもの(無為)である」(長尾・桜部共訳 [2003: 78-81])

(§97) ... sa evaṃ cittaṃ parigaveṣate/ kataṃ cittaṃ rajyati vā duṣyati vā muhyati vā / atitaṃ vā anāgataṃ vā pratyutpannaṃ vā / yadī tāvad atitaṃ cittaṃ tat kṣīṇaṃ / yad anāgataṃ cittaṃ tad asaṃprāptaṃ atha

の命を奪ったのか。過去の心は尽きたものであり、失われたものであり、滅したものであり、変異したもの（*anyathātva）である。すなわち、〔いずれの〕場所にもとどまらず、〔いずれの〕方面にもとどまらないので、それ（＝過去の心）は仮立されたもの（*prajñapti）²³たり得ない。未来〔の心〕は至っていないものである。すなわち、それ（＝未来の心）は生起していないものであり、現れていないものであり、出現していないものであり、変化していないものであり、変容していないものであり、特徴ないものであり、現れていないものである。すなわち、それ（＝未来の心）もまた仮立されたものたり得ない。現在の心はとどまるところがない。すなわち、生起して崩れつつ壊れるであろうものであり、集まり（蘊）になっていないもので

pratyutpannasya cittasya sthitir nāsti / (§ 98) cittaṃ hi kāśyapa na bahirdhā nobhayāyo-m-antarāle upalabhyate / cittaṃ hi kāśyapa arūpy anidarśanam apratiṅgham anābhāsam avijñaptikam apratiṣṭhitam aniketa: cittaṃ hi kāśyapa sarvabuddhair na dṛṣṭaṃ na paśyaṃti na paśyisyanti na dṛakṣyanti yat sarvabuddhair na dṛṣṭaṃ na paśyaṃti na drakṣyaṃti kiḍṛśas tasya pracāro draṣṭavyaṃ nānyatra vitathaviparyāsapatitāyā saṃtatyā dharmāḥ pravartamte cittaṃ hi kāśyapa māyāsadrśaṃ abhūtaṃ vikalpya vividhopapattiṃ parigrhṇāti... (§ 100)... cittaṃ hi kāśyapa svapnasadrśaṃ anātmīye ātmīyasamjñāyā... (§ 102) ... cittaṃ hi kāśyapa parigaveṣamāṇaṃ na labhyate yan na labhyate tan nopalabhyate tan nātitaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ / yan nātitaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ tat tryadhrvasamatikrāntaṃ yat tryadhrvasamatikkṛāntaṃ / tan naivāsti n'eva nāsti / yan naivāsti na nāsti / tad ajātaṃ yad ajātaṃ / tasya nāsti svabhāvaḥ yasya nāsti svabhāvaḥ tasya nāsty utpāda / yasya nāsty utpādaḥ tasya nāsti nirodhaḥ yasya nāsti nirodhaḥ tasya nāsti vigamaḥ avigamas tasya na gatiḥ nāgatiḥ na cyutir nopapattiḥ yatra na gatiḥ nāgatiḥ na cyutir nopapattiḥ tatra na kecit saṃskārāḥ yatra na kecit saṃskārāḥ tad asaṃskṛtaṃ / (KP pp. 35-36.)

Vorobyova-Desyatovskaya [2002: 35 n. 239] にも注記してあるように、上記 KP の引用部分の多くは *Śikṣāsamuccaya* にも引用されていることが知られる。

- 23 【護】では、この箇所「〔いずれの〕場所にもとどまらず、〔いずれの〕方面にもとどまらない」という説明が「現在の心」に当てられている。また、その他の訳では「過去」「未来」「現在」の順で説明されているのに、【護】のみ「過去」「現在」「未来」の順で説明がなされ、「現在の心」については上記のような相違点がみられ、「過去の心」については「其過去心即以滅盡」という説明だけでかなり簡潔なものになっている。

あり、集積になっていないものである。それ（＝現在の心）においては行くものと来るものとして仮立されるものもない。

おお、男よ、心は内なる身体にも入り込まず、外なる対象にも向かわず、〔それら〕二つでないものとしても見られない。²⁴

おお、男よ、心は青色でもなく、黄色でもなく、赤色（*lohita）でもなく、²⁵緑色でもなく、水晶の色でもない。²⁶

おお、男よ、心は色形なく、説示されるものとして存在せず、把捉されるものとして存在せず、障碍なく、幻術のようであり、喩えるものがない。すなわち、それもまた仮立されたものたり得ない。

おお、男よ、心は怒ることなく、迷妄することがない。

おお、男よ、心は生成せず、動作することなく、感受することなく、思うことなく、感じることもない。

おお、男よ、心は本性上（rang bzhin gyis: *prakṛtyā）清浄（自性清浄）である。すなわち、それ（＝心）は汚されないだろうし、清められないだろう。

おお、男よ、心は現世においても存在せず、別世にも存在せず、〔それらの〕二つでないものとしても存在しない。すなわち、そこにおいても存在せず、他においても存在せず、虚空と等しく、比類なきもののごとく、²⁷知覚されないであろう。すなわち、賢明なるものはそれ（＝心）に執着すべきでなく、我がものとすべきではなく、拠り所とすべきではなく、住処とすべきではなく、我としてみなすべきではなく、我がものとしてみなすべき

24 【識】のみ、この内と外に関する記述はあとに現れる。

25 藏訳諸本のうち、BaHeにある *ljang gu*（緑色）という読みをとる。Bthと Phでもそれぞれ *ljang ku*、*ljang khu* という類似した読みになっている。Pに見える *ja hong* では「黄色がかった赤」という意味になるが、その他の資料にみられる *ja gong*、*ja kong* については意味が不明瞭である。

26 この箇所の色について漢訳諸本は、【識】「亦不可知青，亦不知赤、白、黄、黒」【護】「亦無五色：青、赤、黄、白、黒」【天】「青、黄、赤、白」とする。【識】【護】では順序が多少異なるものの、青・赤・黄・白・黒の五色を同じく列挙している。なお、『入大乘論』での引用では「青、黄、赤、白、紫、頗梨色」となっている。

27 この部分は Skt.fr. の *asamasadrśam* にもとづいて訳出する。藏訳では *mi mnyam pa dang mnyam pa mi 'dra ba*（比類なきものであり、等しいものと似つかないもの）となっており、説明的な語句が補われているようである。

ではない。

おお、男らよ、一切法は本性上能力なきが故に動くことがない。おお、男らよ、そのように信じるものに対して、汚されること、あるいは清められること、あるいは悪趣に行くこと、あるいは天界に行くことを私は説かない。それはどうしてか²⁸というと、心の本性たるそれは汚されないだろうし、清められないだろうし、いかなるところへも行かないだろうし、来ないだろうし、留まらないだろう」

§6 化作された男が般涅槃に入る

そこでその化作された男は世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、法界は清浄であり、〔法界に〕行い（業）はなく、〔業が〕熟することはなく、〔法界は〕生じないものであり、成就しないものであると、如来が悟ることは希有である³⁰。世尊よ、私が出家することが許されるならば、善逝よ、〔私は〕出家することを願います」

「比丘よ、来れ。梵行をなせ³¹」と、世尊が彼（=化作された男）にそのようにお説きになると、その瞬間に彼は出家した姿となって、

「世尊よ、私は神通を獲たので、涅槃に入ることを望む³²」
とそのようにも言った³³。そして、その比丘は仏の威神力によって、上空にター

28 蔵訳では本節末尾の一段でのみ「男らよ」と複数形の呼びかけになっている。

29 Skt.fr.で比定されている *cittasya prakṛti* にもとづいて訳出する。蔵訳では *sems kyi chos nyid* (**cittasya dharmatā*) となっているが、意味内容としては「心の性質、あり方」ということであり、大きくは相違しない。

30 Skt.fr.ではこのあたりに *sarvadharmāḥ* という文言が確認できるが、漢訳諸本のうち、これに対応しそうなものは【識】の「如諸法」のみである。Skt.fr.の上記文言も【識】と同じように、「一切法のように」「一切法と同様に」という文言の一部であったかもしれない。

31 *tshangs par spyad pa spyod cig*: **cara brahmacaryam* (LCTSD p.1927) ただし、Skt.fr.や漢訳諸本の対応箇所には「梵行をなせ」という文言は含まれないようである。

32 Skt.fr.にみえる *prāptābhijño* にもとづいて訳出する。蔵訳では *mngon par bgyi ba thob gyis* が相当するが、特に *mngon par bgyi ba* の箇所が難解で意味を取りづらい。なお、【識】では「我所犯罪殺父母已脱、而得阿羅漢」と造り、「神通」にかわって「阿羅漢」の言葉が見える。

33 この直後、【識】「仏言：“從意如所欲。”」【天】「仏言：“隨意。”」と造り、釈尊が同

ラ樹ほど〔の高さ〕³⁴に飛び上がって、自らの火によって身体が焼かれると、³⁵

意をしめす発言をしている。また、Skt.fr.でも (bha)gavān āha / yasyedāmiṃ bhikṣoḥ kālāṃ manyase i(...)とし、上記漢訳諸本と対応するようである。一方、【護】では藏訳同様、釈尊が同意したことは明記されていない。

- 34 *shing ta la gang tsam*: *tālamātram. *tāla は樹木の名称であるが、長さを示すのにも用いられた。MW *s.v.* 参照。【天】では「一多羅樹」とするが、他の漢訳2本では【識】「二十丈」【護】「四丈九尺」というように、具体的な中国の尺度を用いて示している。

- 35 阿羅漢や辟支仏、仏弟子などが般涅槃に入る際に上空に飛び上がって身体を焼くとする記述は他の仏典でも確認できる。ここでは、*Lalitavistara* にみられる類似した記述を掲げる。

「さてまた、比丘らよ、その時、ラージャグリハ（王舎城）の大都市の、ゴーラングラバリヴァルタナなる山に、マータンガと名づける独覚が住したり。彼は、その声を聞くや、あたかも泥の如くに、岩の上に立ち、空中に七ターラの高さにまで上昇し、更に、火界定^{かいじょう}に入りて、炬火^{こか}の如く、般涅槃せりとぞ〔言われたり〕。（中略）また、比丘らよ、その時、ヴァーラーナシー（波羅奈国）のリシパタナ（仙人墮處）のムリガダーヴァ（鹿野苑）に、五百名の独覚が住したり。彼らもまた、その声を聞くや、空中に七ターラの高さにまで上昇し、更に、火界定^{かいじょう}に入りて、炬火の如く般涅槃せり」（外蘭 [1994 : 728]）

tena khalu punar bhikṣavaḥ samayena rājagrhe mahānagare golāṅgulaparivartane parvate mātāṅga nāma pratyekabuddho viharati sma. sa taṃ śabdaṃ śrutvā kardama iva śilāyāṃ prasthāya viḥāyasā saptatālamātram atyudgamyā ca tejodhātum samāpadyolkeva parinirvavau. ... (中略) ... tena khalu punar bhikṣavaḥ samayena vārāṇasyāṃ ṛṣipātane mrgadāve pañca pratyekabuddhaśatāni viharanti sma / te 'pi taṃ śabdaṃ śrutvā viḥāyasā saptatālamātram atyudgamyā tejodhātum samāpadyolkeva parinirvānti sma. (外蘭 [1994 : 304])

他には『増一阿含経』（T. No. 125 2.723b6）や『大方便仏報恩経』（T. No. 156 3.149a29-b3）、『道神足無極変化経』（T. No. 816 17.811c19-20）、漢訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』（T. No. 1451 24.403b22-24）などにも類似の記述が確認できる。特に『興起行経』（T. No. 197 4.165b6-17）では、釈尊の前生である辟支仏が淫女を殺害した後、般涅槃に入る様がやや詳細に描写されている。また、『大毘婆沙論』巻第135（T. No. 1545 27.699c27-700a10）では上述のような自ら身体を焼いて般涅槃に入る記述をめぐって、身体が焼けるのは般涅槃に入る前か後かについて議論があることが論じられている。

さらに、『大唐西域記』（T. No. 2087）では、7世紀当時の中インド（マガダ国周辺）

§7 母殺しの男が釈尊³⁶に罪を告白する

その実在する男は以上のような説法を聞いた。〔その男は説法を〕聞いてからも次のように考えた。

「その男は父と母二人の命を奪っても、彼が般涅槃したならば、私は母のみの命を奪ったにすぎないので、どうして私が般涅槃しないだろうか」と考えて、その時、彼は世尊の元に行って、世尊の足に頭でもって敬礼して、世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私もまた母の命を奪いました」

そこで世尊はその男に「良きかな」という言葉を与えた。すなわち、

「良きかな、良きかな。男よ、あなたは如来を欺いていないけれども、おお、男よ、あなたはどの心によって母の命を奪ったのか。〔あなたは〕心の相続³⁸について理解しなさい」

と広範に〔世尊は〕お説きになった。すなわち、まさに化作された男がなされ

においても、涅槃時に虚空に上昇して焼身するという伝承が伝わっていたことが記録されている。

「彼諸衆生既見迦葉更增憍慢。時大迦葉授衣致敬礼敬已畢，身昇虚空，示諸神变，化火焚身，遂入寂滅。時衆瞻仰憍慢心除」(T. 51.919c19-22)

「便就此石自刺其頸。是時即証阿羅漢果，上昇虚空示現神变，化火焚身而入寂滅」(T. 51.922a8-10)

前者は鶏頭山における摩訶迦葉の入滅に関するもの、後者は旧王舍城近くにある、自害した比丘にちなんだストゥーパの由来に関するものである。水谷 [1971: 278, 288] 参照。

36 定方 [1989: 153]「第26節 母殺しの解脱」 蔵訳では文の途中であるが、漢訳諸本や定方 [1989] での分節を参照して、ここで区切の方が適切と考えた。

37 蔵訳ではこれまでの記述同様、単に「実在の男」(*skes bu yang dag pa*: *bhūtapuruṣa) とするが、Skt.fr.では āṇāṃtaryakāri dvitīryaḥ puruṣaḥ (無間業を犯した第二の男) とし、【識】では「其殺母者」【護】「逆子」とする。【天】では「實造業者」とする。

38 Skt.fr. および【識】【護】では、この後、§5 で説かれた「心に関する教説」が繰り返される。特に【護】では §5 にみられる文言と全同になっている。本稿末尾の諸本対応表では §7a が該当する。これらは拙著 [2012: 48ff] でも論じたように、〈阿闍世王経〉諸本が大きく2つの系統に分かれることを示唆する相違点のひとつである。おそらくは、Skt.fr. および【識】【護】にみられるように、§7a がそなわったものの方が本来的なかたちであると考えることができる。ただし、本稿がもとづく蔵訳にはそれらの記述は欠けているのでここでは訳出しない。

たように、〔その母親殺しの男は〕同じようになされた。

§8 母殺しの男も出家し般涅槃に入る

そこで、そのとき、その男の毛穴（*romakūpa）すべてから地獄の炎が現れた。³⁹
すなわち、彼は焼かれながらも庇護なく、世尊に次のように申し述べた。⁴⁰

「世尊よ、私は焼かれているならば、善逝よ、〔私の〕助けとなってください。
い。〔私は〕世尊に帰依します」

そこで世尊の金色の如き手が、その男の頭に置かれた。手が置かれて間もなく、そのとき、その男のその苦痛⁴¹すべてが滅せられた。彼は身体を落ち着けながら、安らかな状態となって、如来に恭敬した。すなわち、〔彼は〕世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私は出家することが許されるならば、善逝よ、出家することを願います」⁴²

39 悪業を犯したものが毛穴から現れた地獄の炎によって苦しむという記述が、以下のように『賢愚経』や『大智度論』などにもみられる。

- 『賢愚経』「復白仏言：“指鬘比丘殺此多人，今已得道。当受報不？” 仏告大王：“行必有報，今此比丘在於房中，地獄之火從毛孔出極患苦痛。”（T. No. 202 4.427b29-c3）
- 『大智度論』「眼耳鼻口及諸毛孔一切火出。此人宿世惱乱父母、師長、沙門、婆羅門。於諸好人福田中恼令心熱。以此罪故受熱地獄罪」（T. No. 1509 25. 176b18-21）

前者はアングリマーラの業報に関する記述であり、後者は地獄に堕ちたときの様子を述べたものであるが、特に後者においては「前世において父母や師、年長者などを困らせたもの」となっており、本経との類似性、関連性も窺える。

40 【識】では母親殺しの男は「痛みのあまり言葉を発せられず自ら思った」（「痛不可言、則自陳説」という記述になっている。

41 Skt.fr.: *duḥkhā* にもとづいて訳出する。【識】【護】では「苦痛」、【天】では「苦惱」とする。一方、藏訳では、Harrison and Hartmann [2000: 201 n. 91] が指摘するように、*tshor ba* (*vedanā) とする。

42 藏訳諸本のうち、BaGHeにみられる *bde bar gzhesgs pa* という呼格のかたちを採用する。他の藏訳諸本では *bde bar gzhesgs pas* となっていて「善逝が」というかたちになっているが、Skt.fr. の対応箇所にも *sugata* という呼格が確認でき、§8の類似の文では呼格となっているので、上述のように BaGHe にあらわれる、呼格の読みをとるのが妥当であろう。

世尊は彼に対して、⁴³「比丘よ、来れ。梵行をなせ」とおっしゃると、その時、まさにその場所において、彼は剃髪し、法衣を身につけ、髪とひげを剃って七日ほどが過ぎたもの〔のよう〕になって、比丘で、具足戒を受けて百年経たも

43 この箇所から「仏がお考えになった装束を身に纏う」までの一節については、類似のものが他の仏教文献にも確認でき、定型的な表現として知られる。ここでは最も近似しているもののひとつとして、*Mūlasarvāstivādin Vinaya Saṅghabhedavastu*における用例を掲げておく。

「彼は世尊によって言われた。「来れ、比丘よ。梵行をなせ」と。世尊の言葉が終わってすぐに、〔彼は〕剃髪し、上衣をまとい、鉢と水入れを手にもって、髪と髭をそって七日間が過ぎたもの〔のよう〕になって、具足戒を受けて百年を経た比丘の〔ごとき〕威儀を備えるものとなった。

彼は如来によって「来れ」と言われると、剃髪し、身体を上衣で覆い、すぐさま、感覚器官を落ち着けたものとなって、仏の意向にそった装束となった」

sa bhagavatā ābhāṣitaḥ ehi bhikṣo cara brahmacāryam iti; bhagavato vāco'vasānasamanantaram eva muṇḍaḥ saṃvṛttaḥ, saṅghātiprāvṛttaḥ, pātrakarakavyagrahasthaḥ, saptaḥāvaropitakeśaśmaśruḥ, varṣaśatopasampannasya bhikṣor iryāpathenāvasthitaḥ; āha cātra:

ehiti coktaḥ sa tathāgatena

muṇḍaś ca saṅghātiparitadehaḥ /

sadyaḥ praśāntendriya eva tasthau

nepathyito buddhamanorathena // (MVS, Part I: 206.15-22)

完全には一致しないものの、上掲の MSV のサンスクリット文と蔵訳〈阿闍世王経〉のもとになったであろうサンスクリット文はかなり類似したものであったと予想でき、蔵訳〈阿闍世王経〉の訳出にあたっては上掲の MSV サンスクリット文を参照した。

上掲のような定型的表現については、平岡 [2002: 170, 198-199] で指摘されているように、*Mūlasarvāstivādin Vinaya* のみならず、*Divyāvadāna* や *Avadānaśataka* でも並行表現が共有され、*Mahāvastu* や『摩訶僧祇律』などでも類似する記述が見られる。しかし、上掲の偈頌に関しては有部系以外の文献には確認できないようである。

一方、Harrison and Hartmann [2000] でも指摘されているように、【識】【護】では「その時、まさにその場所において、彼は剃髪し」以降の記述、すなわち、上掲の MSV サンスクリット文の大半を欠く。また、【天】では「如来が『来れ』とおっしゃると」以降の部分、すなわち、上掲 MSV のサンスクリット文の偈頌の部分の欠く。しかしながら、少なくとも、現存する蔵訳〈阿闍世王経〉には、有部系の文献に特徴的とされる偈頌を含んだ、上記の定型的表現を共有することは注目に値する。

の威儀にとどまるものとなった。如来が「来れ」と説くと、剃髪し、身体には法衣をつけた彼は、間もなく、感覚器官を落ち着けつつ、仏がお考えになった装束を身に纏った。

そこで、世尊はその比丘に四聖諦⁴⁴を含んだお言葉を説くと、彼はそれを聞いて、法に関して、塵がなく、汚れを離れた清浄なる法眼に加えて、〔彼は〕道を修して阿羅漢となった。すなわち、彼は世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私は般涅槃することを望む。善逝よ、私は般涅槃の時に至った」
世尊はおっしゃった。

「比丘よ、あなたは今そのときに至ったと知りなさい」

そのとき、彼は上空に七ターラ樹ほどの高さ⁴⁵にとどまって、自らの火の力によって身体が焼かれた。〔その男の身体が〕焼かれたそのとき、炭と灰もなくなり、幾百千の諸天もそのものに敬礼した。

§9 不可思議なる衆生の行い⁴⁶

そこで、長老舍利弗は、その男が教化されたのを見て、希有であるとした。すなわち、世尊に次のように申し述べた。

「如来の法と律はよく説かれた。すなわち、そこにおいては無間〔業〕(**anantarya*)をそなえるものたちでも教化されるであろうことは、世尊よ、希有である。善逝よ、希有である。世尊よ、衆生たちの多種多様な機根を知るそのことは、如来・阿羅漢・正等覺者と文殊師利法王子、さらにそのような鎧を着た菩薩・大士をのぞいた、他の誰にとつての対象となるでしょうか。あらゆる声聞と独覺にとつては〔そのことは〕対象ではありません」

世尊はおっしゃった。

44 Skt.fr.では、(*duḥkhaṃ duḥkhasamudayaḥ duḥkhanirodhaḥ mārgaḥ*)と比定されているように、四諦それぞれが具体的に言及されているようである。

45 注34でも触れたように、「ターラ樹」という言葉は長さを表すものであり、ここでも先と同じく【識】【護】では寸法を用いて具体的な長さを示し、【識】「百四十丈」【護】「四丈九尺」とする。ところが【識】では先の箇所⁴⁴の7倍になっているものの、【護】では同じ長さである。【天】では「七多羅樹」とする

46 【天】「卷第六」

「舍利弗よ、その通りだ。〔あなたが〕説いたとおりである。すなわち、そのことは仏・世尊らと、菩薩・大士で忍に住せるものたちにとっての対象である。すなわち、舍利弗よ、あるものが地獄〔に赴くもの〕とあなたが知っても、私（＝釈尊）はそのものたちに関して涅槃の法を有しているとも見ることもある。舍利弗よ、あるものが頭陀の項目と、満足すること、よい習慣（戒）、聞くこと、三昧を具えていて、そのものに関して涅槃の法を具えているとあなたは知るけれども、如来はそのものに関して地獄〔に赴くもの〕とご覧にもなることもあるので、舍利弗よ、あなたは衆生の行いについて考えることから離れるべきである。それはどうしてか⁴⁷というと、舍利弗よ、衆生の行いは不可思議であるからだ」

§ 10 母殺しの男の前世における功德

「舍利弗よ。母を殺し、この説法を聞いて、般涅槃したところの、その男⁴⁸

47 この箇所「衆生の行い（*sattvānām caryāḥ）は不可思議である」とする言葉は、後続する第Ⅻ章後半部分において、阿闍世王が未来世には仏になることが説かれたあとにもあらわれる「衆生の行いは不可思議である」という言葉と対応する。

また、『増一阿含』（T. No. 125）では「四不可思議」のひとつとして、「衆生不可思議」というものが挙げられ、以下のように説かれている。

「云何衆生不可思議？此衆生爲從何來，爲從何去，復從何起從，此終當從何生？如是衆生不可思議」（T. 2.657a22-25）

まさに本経での上記の教説とも対応する内容になっており、これに対する注釈である『分別功德論』（T. No. 1507）には、より具体的な記述がみえる。

「何謂衆生不可思議？或云劫焼後，水補火処，隨風吹造宮殿訖，下有地肥。光音天上諸天輩遊戲至地漸嘗地肥，遂使身重不能復還。食多化為女，轉減至薄餅粳米，失神足光明，還復為人，善行生天，惡行三塗，流轉五道無有常准。正使欲窮盡一人根本所由，尚不能知。況復一切衆生而可思度也。是爲衆生不可思議也」（T. 25.31a19-26）

また、『瑜伽師地論』『摂決摂分』（T. No. 1579 20.655a7-b5）において6種の不可思議が掲げられる中でも「衆生」に関するものが含まれ、上掲の『増一阿含』とほぼ同様の説明がみえる。

「有情思議者，謂如有一即依身見如是思議。今此有情從何而生？是諸有情誰之所作？乃至有情當何所往？是諸有情何處滅盡？」（T. 20.655a20-23）

48 Skt.fr. にみられる śrutvā にもとづいて訳出する。【識】【護】でも「聞」とされている。藏訳では *gnas te* 「（この説法に）住して」となっているが、意味するところに大

をあなたは見たか」

〔舍利弗は〕申し述べた。

「世尊よ、私は見た」

世尊はおっしゃった。

「舍利弗よ、その男は五百の仏のもとで善根を植えたものであり、しかも、心は本性上清浄（自性清浄）であるというこの説法も聞いた。舍利弗よ、その男はこの説法を聞いて、一切法を正しくありのままに見たので、解脱した。それゆえ、舍利弗よ、この法門によってもまた次のように知られるべきである。すなわち、あらゆる時においても、すなわち、現在、あるいは私（=釈尊）が涅槃に入った時でも、甚深で、執着なく、趣くことのない、このような説法を聞いて、聞いてからも信じることをなすならば、心における煩惱あるいは悪友の力によって不善なる形成力（*'du byed: *saṃskāra*）をあらわしても⁴⁹、余すことなく解脱しない間、法に関する理解そのものは捨てないであろう。舍利弗よ、このような法に関して信じるころの、そのものたちは悪趣に赴く、と私は説かない。

舍利弗よ、それゆえ、この法門よりわずか四句からなる一偈、あるいは一句を受持して、他に説くところの彼ら衆生たちが必ず一切智者になるで

きな相違はないであろう。

49 *sems la kun nas nyon mongs pa 'am/ sdig pa'i grogs po'i dbang gis mi dge ba'i 'du byed dag mngon par byed kyang/*

この部分は難解である。特に、上記で「不善なる形成力（*saṃskāra）をあらわしても」と訳出した *mi dge ba'i 'du byed dag mngon par byed kyang* の部分が難解である。漢訳諸本では【識】「若為悪師所誤、若其心不足者而所犯罪」【護】「又人迷惑而心乖者、随惡知友而犯罪釁」と造り、直前の「心における煩惱」や「悪友」によって「罪を犯す」とされており、それらが対応するようである。

50 「この法門よりわずかに四句からなる一偈」云々の表現は仏典でしばしば登場する定型句の一つである。ここでは *Vajracchedikā Prajñāpāramitā* における一例を掲げておく。

yaś ceto dharmaparyāyāc catuspadikām api gāthām udgrhya parebhyo deśayet.
(Vajra § 13e) 「もし、あるものが〔この〕法門から四句よりなる一偈でも受持して、他の人々に説くならば」

ただし、【識】ではこの記述は欠けている。

51 この箇所は藏訳諸本のうち、A および D にみられる *thams cad mkhyed par*、および

あろうと理解されるならば、あるものたちたちが〔この法門を〕聞いてから正しく行うことは言うまでもない」

Bthにみられる *thaMd* (= *thams cad* の短縮形) *mkhyed par* にもとづいて、上記のように「一切智者」(**sarvajñā*) という言葉があったと見ておく。他本では単に *thams cad* (**sarva*: 一切、すべて) となっていて意味が通らない。ちなみに、【天】の「仏一切智」が対応するようであるが、【識】【護】には対応する語は見られない。

表 1 〈阿闍世王経〉第Ⅺ章前半部分 漢訳・蔵訳諸本対照表

	T. 626	T. 627	T. 628	Skt.fr.	A	B	Ba	Bth	D	G	He	J	L	N	P	Ph	S	T	U
§ 1	402c27	424a21	444c28	192. No. 6	71b9	330a7	143b1	89b3	257b1	42a6	140a1	282b8	337b7	410b1	269a2	69b4	333a3	307a3	297a4
§ 2	403a3	424a28	—	—	71b11	330b2	143b5	89b5	257b3	42a9	140a5	283a3	338a2	410b5	269a5	69b8	333b1	307a7	297a7
§ 3	403a6	424b3	445a8	—	72a2	330b5	144a1	89b8	257b5	42b2	140b1	283a6	338a6	411a1	269a8	70a4	333b4	307b2	297b2
§ 4	403a14	424b13	445a16	—	72a6	331a4	144a7	90a4	258a2	42b6	140b7	283b2	338b4	411a7	269b5	70b2	334a3	307b8	297b8
§ 5	403a20	424b18	445a20	194-195; No. 7a-b	72a9	331a5	144b4	90a6	258a5	42b9	141a4	283b5	339a1	411b2	269b7	70b6	334a7	308a4	298a4
§ 6	403b9	424c9	445b5	197; No. 7c-8a	72b6	331b6	145b2	90b6	258b6	43a10	142a2	284a7	339b6	412b1	270b2	71b4	335a7	308b8	298b8
§ 7	403b16	424c16	445b15	199; No. 8b	72b10	332a2	145b7	91a1	259a2	43b3	142a7	284b3	340a3	412b5	270b6	72a1	335b4	309a4	299a4
§ 7a	403b23	424c23	—	199; No. 8c-9a	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
§ 8	403c12	425a14	445b21	201; No. 9b-10a	73a2	332a6	146a4	91a5	259a5	43b7	142b5	284b6	340a8	413a3	271a2	72a6	336a2	309b1	299b1
§ 9	403c21	425a25	445c11	202; No. 10b	73a10	332b7	147a2	91b4	259b5	44 ^a a7 ^{2a}	143b3	285a8	341a4	413b6	271b3	73a2	336b7	310a4	300a4
§ 10	404a2-	425b9-	446a1-	—	73b5-	333a7-	147b4-	92a1-	260a4-	44 ^b b3-	144a7-	285b7	341b6-	414b1-	272a2-	73b3-	337b3-	310b4-	300b5-
	9	21	29		11	333b5	148a5	7	260b2	10	b6	286a5	342a7	415a1	8	74a4	338a3	311a3	301a4

52 ゴーンドラ写本の No. 43 のフォリオの後に、*zhe bzhi gong ma* (44 の前) と読める番号が振られた 1 枚のフォリオがあり、それを「44」というかたちで表記する。ただし、筆跡や余白から判断する限り、同フォリオは後世に補われたもののようには見えない。